

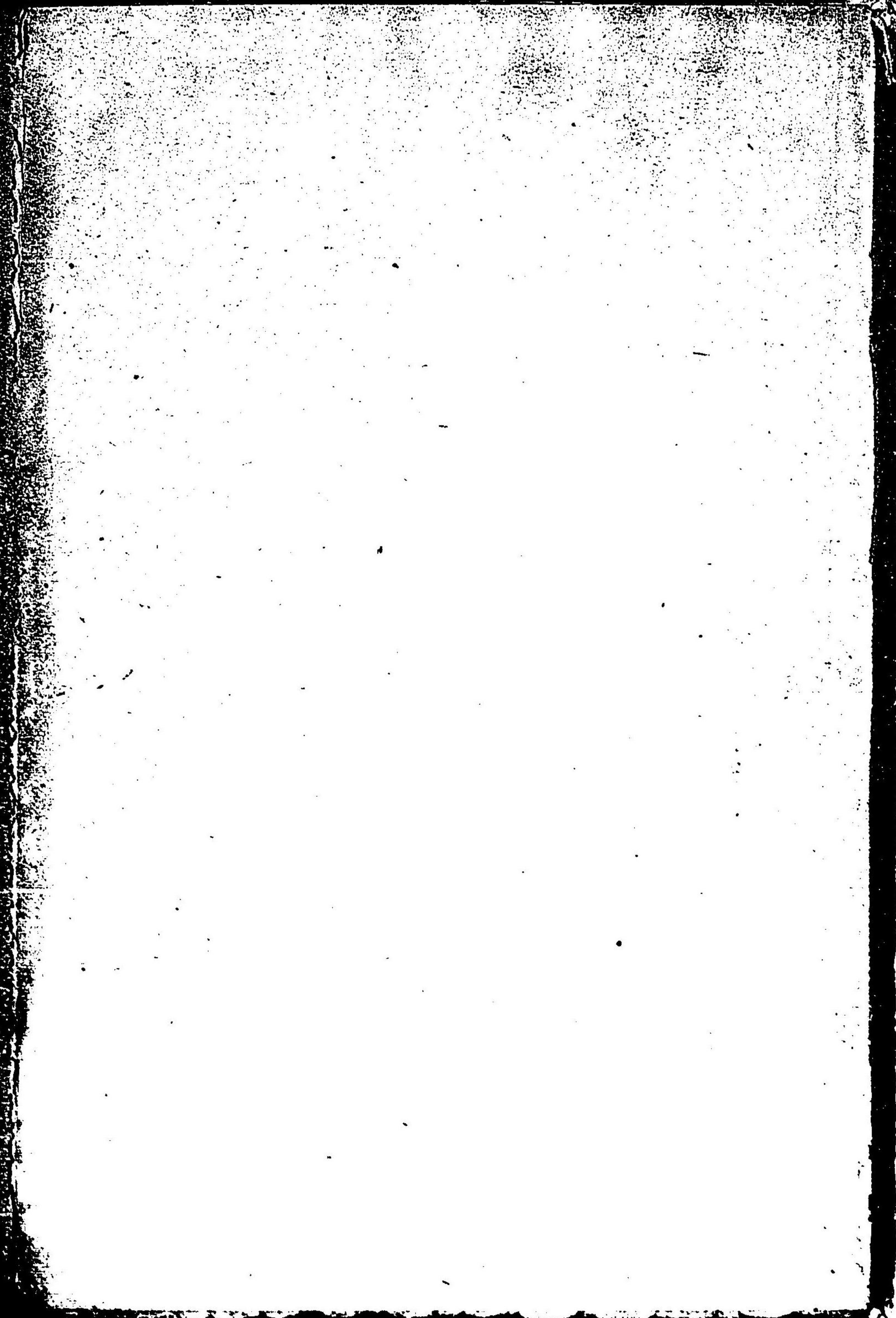
特12

981

八幡太郎武勇

譽全







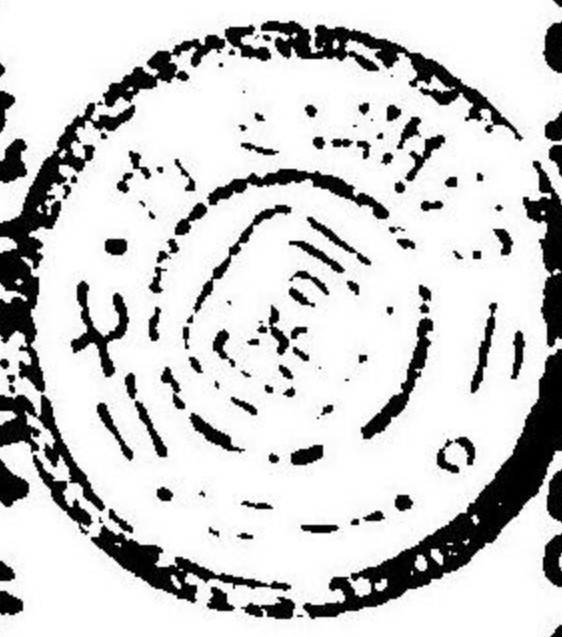
八幡太郎武勇譽

緒言

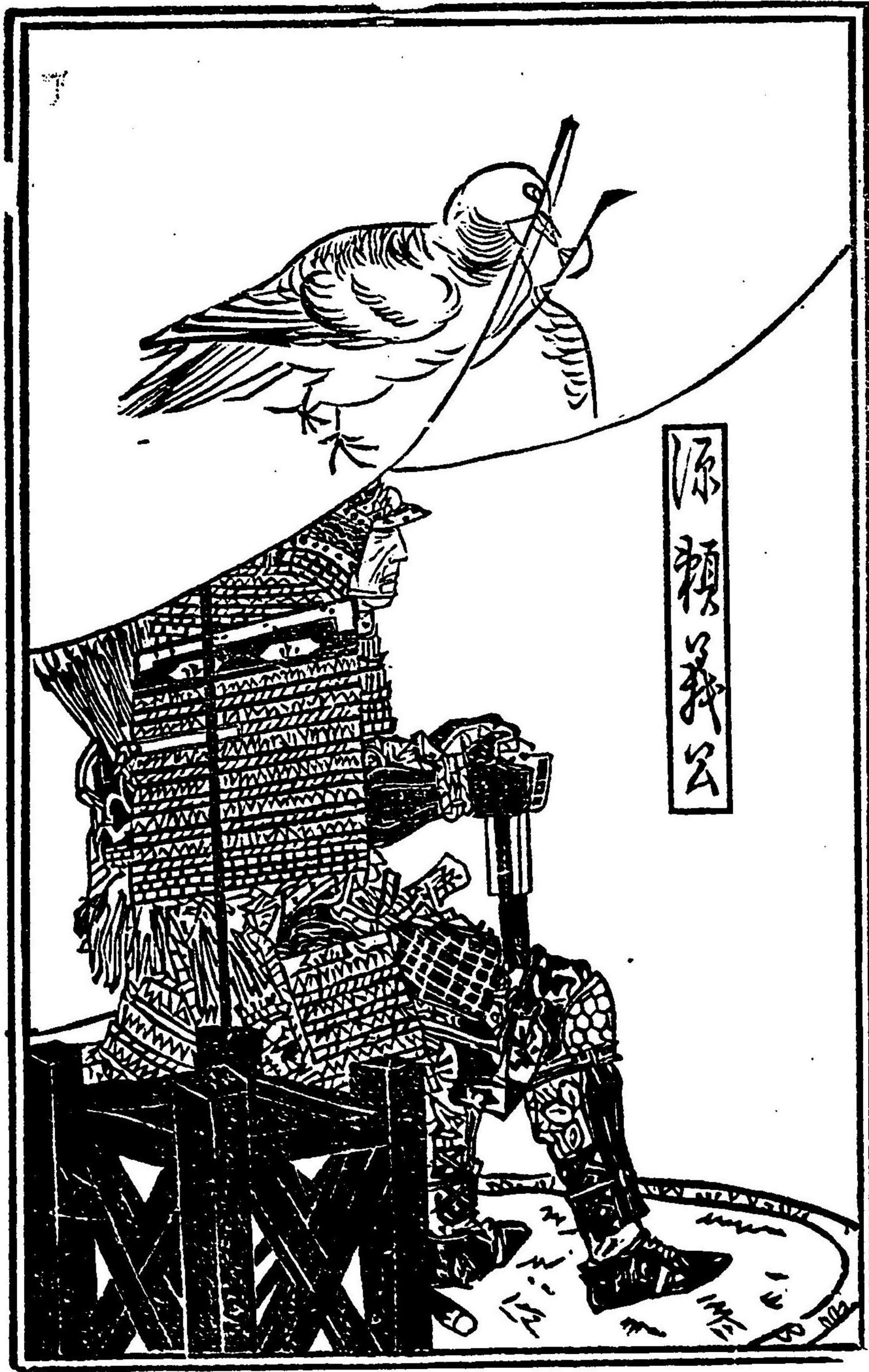
夫有因則有果有果則有因因果應報不可免永承康平之
間陸奧豪族宗任貞任起亂義家與父賴義討之而大有其
功當于是時徵此父子彼等桀黠之才終荐食上國誰能禦
之實有大功德如此而朝廷目以私鬪如不關知義家官不
過四位衛尉嗚呼二氏之不幸可憶也然八幡公臨終遺書
其家曰吾後世必有操天下之權者果其福出于賴朝掌握
天下是因因果應報理當然倘爾令足義家父子得賞格其結
果不可知也以是不足深惜也茲贅一言

明治二十年仲冬

編者識



6874



八幡太郎武勇譽目録

- 第壹回 頼時驕奢逆威を振ひ 頼義武畧強敵に克つ
- 第貳回 一兇駭れて一兇起り 雄將敗れて雄軍憤ゆ
- 第三回 官軍兵を勤して鎮守府を覆し 夷賊軍を失して小松柵を落す
- 第四回 衣川の詠歌能く危急を免れ 厨川の舞踏却て没落を買ふ
- 第五回 貞任戦没して頼義の勇轉顯れ 宗任降服して義家の名益々響し
- 第六回 武衛家衝乱逆を企て 義家義光征討を務む
- 第七回 阿野の仁智千歳されを嘆とし 二賊の暴戻百世されを嘆とす

八幡太郎武勇の譽目録

八幡太郎武勇

特12
981

第壹回

頼時驕奢逆威を振ひ
頼義武畧強敵に克つ

夫長將の軍を統るや已を恕して人を治め惠を推し恩を施し勇士日々新なり戦事の属の發するが如く攻事の河の決とるが如し故に其業可望して不可當可降して不可勝是に百戰百勝の善なる者よめらす戦はずして敵兵を屈するの善の善なる者をや又英雄の天下に起るや其師必ずしも辨有り其家必しも名あり名の存とる所の人々に歸服す辨のふる所の民之に服す茲に奥州膽澤、和賀、磐井、栗原、斯波、磐手六郡の酋長區安太夫安倍頼長といふ者有りけり祖父を忠頼といひ父を忠良といふ忠頼は時より威名大に振ひ部落皆其勢に怒れをといふ者なしされば自強きを負て六郡を横行し百姓を規畧し子孫尤滋蔓なり頼長の代に及で驕奢益々暮り終に賦貢を輸さず徭役を勤ざれども誰人も敢てよれを制せんと能くぞ承承六年太守藤原朝臣登任三千餘騎の兵を發してよれを攻む出羽の秋田城介平朝臣重成先鋒と

五

あり登任後陣たり頼良此事を聞然らば逆討して追拂へど諸節の俘囚を率ひ鬼切部田陣し
 官軍を邀へ撃て大よふれを破りければ登任と旬と都と逃上り重成り本國を歸て國境を守り
 ける是より頼良益々暴威を委おして下民を虐ける程に國より早馬打て都へ急を告ぐる間
 公卿僉議あつて追討將軍を擇れけるが當時此の逆賊を討平ぐべき者は源朝臣頼義と如く
 となしと評議一決し此由を奏聞に及びければ則ち勅許ありて頼義を陸奥守兼鎮守府將軍と
 命され東夷追討の給旨を下さるける頼義勅を奉はり同年六月七日進發し玉ふまづ一族に
 綱子八幡太郎義家、次男加茂二郎義綱、舎弟肥後守頼清、同乙兼掃部助頼季、同河内冠者頼任
 同常盤五郎義政是等を始として宗徒の一族二十餘人此外他族の人々もは加藤修理少進景通
 平息右馬允景季、同武藏介貞輔、大宅大夫光任、波多野兵庫介、佐伯經範、同經秀、同兵衛尉季
 清等を始として惣勢都合一萬餘騎隊列整とて打續て都を出發せられければ路次の老若男女
 皆どりぐに其武徳を稱へぬとなりける路にても近江、美濃、尾張、參河、遠江、甲斐、信
 濃、伊豆、駿河の軍兵二百騎三百騎五百騎千騎我もくと馳加とりけり同廿五日相模國
 着玉へと鎌倉權頭景成三百騎にては迎へに參じ頼義の館へ入奉りぬ此處にて三日逗留
 留りて諸軍の疲を休めらるる舊國の任人三浦太郎公義も一族と俱に千騎五百餘騎を引て參

義す頼義先年院の御官代の勢に因て相模守を任せられける時能く仁愛を施して下民を撫育
 し玉ひければ今度の下向を喜び我もくと馳參りける程に軍勢忽地變護の如くみ充満せし
 ららば急げとて將軍頼義數萬の兵を率めて衣川へと發向せらるる爰も頼良が伊具十郎平永
 衡并に直理權太夫藤原經清の二人と思ふ仔細や有けん勇む叛て將軍のは勢も加とりける此
 時永衡緋緘の甲に銀の星冑を戴さければ武者振殊に目立て見ゆたり出羽國の任人平太夫
 國妙密に頼義み申しけると永衡今外將軍に服従するが如くなれば内必ず奸謀を挟みいべ
 し彼着る所の冑衆も同々からず是合戰の刻敵己を射させとどの心持へふていこん前漢の
 赤眉三國の黃巾豈に軍を別の故にいとすや早く彼等の首を刎て内應の根を斷玉ふべとす
 けをば將軍此言理ありと宣ひ事託へて永衡をば前ふ召され貳心を抱ける旨を責られける
 ゐ永衡事の顯これたるを察し一言の答へもなく首を低て居たりけるを修理少進景通于息景
 季ふ訖と目合すれと心得て衝走寄て起しも立す取て押へ舞と擲めて中門の外へ引出して
 永衡が腹心の郎黨四人と共に立お首を斬る經清此事を聞さては我身の上と怖て自ら安ん
 ぜず竊お夜お紛れて頼良の陣する衣川へ遁歸れり且説將軍頼義は路次を急がれける程も幾
 日もなくて奥の境へ入り玉ふ頼良斯と聞大お懼て如何とせんと種族を集めて評議置くなり

し所不會と天下の大赦ありければ大に喜び使者を以て降参を乞せけるやう頼貞固より天朝に對し奉り聊を貳心これあるにあらす唯父祖は積威を依て部属従ひ服しみの處頼貞不肖あしておれを察せず自ら因陋を負で思はず天憲を犯し終に將軍の親征を煩とす至る其罪萬死に當れり然るも今幸ひあして大赦不會枯葉始て甘露の潤を得たるが如く誠か再生の恩に堪へず仰ぎ願とはく將軍海の如き寛恕を垂れて前罪を免し斧鉞を止りて雨露の恵を下し賜はらるる今より名を改め身を委ねて將軍の下僕に列し只管忠勤を履みいへしと言えけるるも頼貞固より仁心深ければ己往を咎めずして許容ありしにぞ頼貞限りなく喜びそれより名を頼時と改め家人の並お成て任へたり是に於て頼義が四年の任限満るまでは境内悉く治平よして何事もなかりける期て幾許もあくして將軍交替の期にもなりしかを鎮守府へ入て大小の公事を理め玉ふ事数十日ありしが其間頼時忠實しく給仕し深く餘波を惜しみ駿馬金寶の類數多幕下お捧呈して敢て貳心の體見ぬざりける斯りし程に頼義將軍鎮守府と打立て阿久利河まで來玉ひて一宿せられけるも其夜何者ぞを知らせず藤原朝臣光貞が陣所へ斬入つて人馬を多く傷けたり將軍此事を開召れ安からぬ事か何人の所爲かや宜く詮索を遂ぐべしと仰せける程に段々愈々及びたる處頼時の嫡子貞任先年光貞が妹の妍妹をばの聞見ぬ戀あつてがれて明白其事を聞て所望お及びけるに光貞彼が素姓を隠しみておれを頼時掌せざりしかを貞任深く耻として此體を露さんか爲お斯る亂暴の勳をなしたる由を聞ければ將軍以の外お怒り玉ひ國守の同勢お向ひ斯様ある事をなすと即ち頼義に向ひ弓を引と敢て襲あるとあし疾く貞任を召して罪お行ふべしと宣ひけるを頼時傳聞て子姪お語て言へりける人偏の世おあるの昔妻子の爲なり仮令貞任愚なりとを父子の愛で弄するも忍びんや面り我兒の罪せらるるを見んよりは如す關を閉て命を賜さらんふと吾亦將軍の勢を拒む足りなん縦や戦利あらすとも一様相共お亡びなむ是本懐ありとて急お衣川の寨お盾籠り關を閉ち檣櫓數多構へ射手を置き寨の廻りおは敷お五十餘間隙を堀らせ乱抗遊茂木を紮らえ籠城の備嚴重おえて是く敢對し参らすの色顯おれたり將軍斯と聞召さるるに我都お歸るべからずとて陸奥守お再任を乞はれけるに此時都おて今年頼義の任終る間器量の武士を逐み新司を補せらるるを頼義も合戦の告を聞か辭退して任お赴かず因て諸卿更お僉議を遂げ重て頼義朝臣を任お尙征伐せしめんとせらるるの刻將軍再任を乞ふ旨の願書到來したるを以てこれを允され征伐を遂ぐべし由給旨を下されける頼義大に喜び玉ひさらば軍兵を發して追討せよとて軍議區々あり然るも今年より國內饑饉おして兵糧一粒の

ぬ戀あつてがれて明白其事を聞て所望お及びけるに光貞彼が素姓を隠しみておれを頼時掌せざりしかを貞任深く耻として此體を露さんか爲お斯る亂暴の勳をなしたる由を聞ければ將軍以の外お怒り玉ひ國守の同勢お向ひ斯様ある事をなすと即ち頼義に向ひ弓を引と敢て襲あるとあし疾く貞任を召して罪お行ふべしと宣ひけるを頼時傳聞て子姪お語て言へりける人偏の世おあるの昔妻子の爲なり仮令貞任愚なりとを父子の愛で弄するも忍びんや面り我兒の罪せらるるを見んよりは如す關を閉て命を賜さらんふと吾亦將軍の勢を拒む足りなん縦や戦利あらすとも一様相共お亡びなむ是本懐ありとて急お衣川の寨お盾籠り關を閉ち檣櫓數多構へ射手を置き寨の廻りおは敷お五十餘間隙を堀らせ乱抗遊茂木を紮らえ籠城の備嚴重おえて是く敢對し参らすの色顯おれたり將軍斯と聞召さるるに我都お歸るべからずとて陸奥守お再任を乞はれけるに此時都おて今年頼義の任終る間器量の武士を逐み新司を補せらるるを頼義も合戦の告を聞か辭退して任お赴かず因て諸卿更お僉議を遂げ重て頼義朝臣を任お尙征伐せしめんとせらるるの刻將軍再任を乞ふ旨の願書到來したるを以てこれを允され征伐を遂ぐべし由給旨を下されける頼義大に喜び玉ひさらば軍兵を發して追討せよとて軍議區々あり然るも今年より國內饑饉おして兵糧一粒の

資だもあかりける間諸國の軍勢忽地轉送ふ勢も大衆各々心あらずも散ぢけれと續て夷族征伐の事も叶はず空しく年序を送り玉ひけるうち天喜五年ととなりぬ其年六月頼義家人等を召集て宣ひけると偕も頼年凶飢打續て國民困窮し糧食給せず己を得て徒ら歲月を送りつるが今年も既わ半々及べり頼義苟も朝敵追討の給言を蒙りながら何時まで斯て居るべきを仮令兵糧の資も軍勢催促も應せずとも我一族郎従一人も残らず衣川へ推寄て同族討死し國家の爲も忠節を全うせんと思ふと如何と宣ひけれを各々一議に及むず御説御尤に候と伺て其月五日鎮守府を立て衣川へと發向せらる頼時斯と聞て弟僧良昭に四千餘騎を相添て同月七日途中まで出向とせけるに道の程二三里にも過ぐりける官軍より行合たれば互に備を立門を揚させて矢合せを始めたる早入亂れて戦ふたり頼義の勢も僅に七百騎にも足らず敵に較れを對揚すべくとあき寡兵なりと雖も皆數代恩顧の郎従なれと唯義の重きを知りて身を輕ト命を肩とせせず火出るまでを戦ひけんと勇誇たる良昭の兵とも小勢も荒立られて溜り得ずしどろみなつて見ぬたりける加藤、後藤、首藤、坂戸、大宅、佐伯の一黨を始め宗徒の郎従と勝も乘て奔ると政立けるも良昭を防ぐべき徳盛で後よ其身れも限るゝとを得て這く衣川へ通歸りぬ

第二回

一兎死れて一兎起す
雄將敗れて雄軍潰す

且説這回の合戦に夷賊多之討れたりと雖も頼時肩ともせず鎮守府兵糧も疲れ官軍次第も落失ると聞さうらむ此圖を外さず攻寄て先途の塵辱を雪げとて準備おさく漢あり官軍と一旦賊軍を追散しけれども外に之援兵なく内にと糧食盡けれを人々將軍の御前に候じて唯此上と空しく餓死を待んより衣川に攻入り美事討死して名を後代に留り候べしと申合しけるを修理進景道聞て間少打案じ居たるがやをら面を上げてやけると方々討死の覺悟至極尤には候へども景道退て考ふるも未だ以て命を棄つべき時よわらず抑今天下に於て文武兼備の良將を誰とといふも我君の外有るべからずされとよと朝家も征伐の大任を成下されし儀も候とすや然るを一旦の困窮より思ひ極めて餓死せんと敵國逆威を振ひ天下の豪傑源頼義を念なく滅したりかんと高言を吐なん然する時と東國はいふも反をす天下の武士皆彼か下風よ立て王化も歸する者一人も有るまじされを今度の一舉と朝家安危の存する所あして當家存亡の係る所されを努く卒爾に討死の儀思ひかけ玉ふべからず鎮守府の天あり君の御耻辱にあらずいひにも討死を以て兵を招き今一度快く合戦を其後國解を奉り

官符を申請て兵糧を他國より召し更に軍氣を養ひあを朝敵退治の功を奏せんと何の仔細か
 候べき金爲時、下毛野與重と多年當國に住て奥地の案内を知りたれと在る所に往て流人
 俘囚に甘説せしめ候と、將軍の御武徳を慕ひ賊徒の暴悪を憎み思ふの士と旨馳参すべきに
 て候と言ひも果さるる爲時與重坐を進め景道館を申されたり當國駐騎の者共若し其罪をた
 る御免しあるに於てと千や二千を驅催す事容易かるべく候まづ、試み懸ぎ奥方より打越見を
 やと存候とて御殿を乞ひて殺向したりける斯て爲時、與重と使節として諸所を巡歴して便
 宜の兵を催しける、絶國、仁土呂志、宇曾利三郡の衆、我とくと馳集りける程に其勢二千
 騎になりぬけり爰に頼時が一族、安倍富忠といふ者も、武勇の聞か高き其手に屬する兵
 多けきを爲時自ら往て、順逆の理を説く、勸諭し味方相としかを富忠されと會得まて二
 類を率めて爲時に従ひける此時、大友頼時は子忠貞任宗任等に、衣川の柵を守らしり我身は
 鳥海の城に居たりしが爲時、與重、奥地の軍兵を催促し、馳へ富忠も官軍に屬したりと、關大
 木憲若し遇せむ必ず大事お及ふべし我まづ富忠よ説て再び味方に附くべしと九月三日
 自ら三千五百餘騎を率ひて鳥海を打立行向ふ富忠此由を聞勢を切所に伏て待所に頼時斯
 ども知らず固く一族の事なれと今度彼官軍を従ひしは一時利害の迷ひなるべし我面り

旨説せむ又志を翻して味方に参らんとて墓より、要害をせざりけるを富忠見澄して
 合圖の太鼓を打鳴しければ彼處の望此處の谷に埋伏したる兵ども一度お吐と聞を作りて
 起り立ち前後より鏃を汰へて射たりける元來豪氣の頼時此体を見て切齒をなし大に怒り物
 とまき敵の舉動かち千騎二千騎の伏兵何事かあるべき蒐散して平場に出し一揉み揉破れど
 高聲よ呼とり、鬨り眞先に進みけるが此れや運の窮めありけん誰が射たる矢とも知れず彪と
 鳴響て飛來り頼時の綿鬚の外より骨を碎いて立たりける流石の頼時、灸所の痛手よ杖にも
 溜らず既に落んとせしを自ら屬せし我若此處に瘞まむ味方忽地阻礙して敗北し我首も敵に
 得られなんと思ひ目眩心迷ひけれも故と何となき体して其矢をかなぐり捨て鞍の前後も
 楚と手を懸け暫く下知を傳へたりしが稍晩景お及びければ與重の陣をさつと蒐抜て關と
 鳥海へ引にけるが痛手も堪へず物具を脱と忽地息絶たり斯て頼時と死たれども一門諸徒は
 猶も敵對の用意嚴重なるが中に老長子貞任と父お劣らぬ豪勇にして是までも毎度官軍を悩
 しけるが今度新に頼時が死てよりは一層悲憤に堪へず中陰作善の聲もあく唯敵を殺て父
 が怨魂を慰めんとぞ計りけるさる程鎮守府めて富忠の計略に依て酋長頼時誅伏せしか
 ぞ其様を嘆し并に官符を賜て諸國の兵を召し併て兵糧を納れ餘黨を誅滅すべしとて天啓



五年秋九月國解を遷らせられたりける其文曰く

陸奥守兼鎮守府將軍源朝臣賴義謹言臣使三金爲時下毛野與重等廿說與地俘囚上令與三官軍於是是範屋仁土呂志宇曾利合三郡夷人一安倍富忠爲首發兵從爲時而賴義聞其計自往陳利害衆不過三千人富忠設伏兵擊之檢阻大戰二日賴義爲時矢所中還爲海柵死但餘黨未服請賜官符一徵發諸國兵士兼納兵糧悉誅餘類焉隨官符召兵糧發軍兵臣賴義誠惶誠恐謹言

天喜五年九月日

都にて此の國解を一覽あてて群卿衆評あり賴時誅伏せし上之宜く勳賞を行ひ諸卒の軍を慰し餘類を誅罰せしめらるべしと申さるゝをり否と上酋長誅伏の事既あ功なきよわらず雖も殘黨猶未だ殄滅せざる間勳賞の妙法は姑く無念ありと宣ふもありて群卿の議同じうらざるにぞ然らむまづ諸國の軍勢催促兵糧運送の官符のみを下さるべしとて賴時を以て下されける斯て其年十一月上旬官符下着したるを以て直ちに軍勢兵糧を催促せられしれども墓しく到着せず賴義宣ふやう時漸く寒氣向へを追く戰難に及ぶべく空しく斯てあらんよえ何時大切を奏し得らるべき所詮運之天に任せ勝敗を一時に決するも如ざるなり

と宣ひ親ら千八百餘騎を率ゐて發向せらる責任期と聞てさらを用意せとて金爲行が河崎の柵を以て營となし鳥海まで待蒐たり悉りし程に賴義鳥海を押寄て鯨波を揚げ矢合せの箭を射たりけむ城中を闕を合せ當の矢を射蒐けて既軍始りけり箭手は僅千八百餘騎城兵は四千騎にも餘る兵を固より對揚の合戦にあらざれども皆忠義を重んぶ身命を輕んずる者共なるよぞ千騎が一騎にあるまでもやわり此場を引じものごと晝夜四日息を繼がず攻めける程中を今とまかくに防さぬてぞ見えたりける時に天寒く風烈しく吹雪き綿を擧て捨つるが如く雪降り出し四山忽地體之道路看く往來絶て兵糧轉送の便を失ひたきを官軍食なく人馬共に疲れて進退自在ならず依て皆攻口を引退き足場を選びて陣屋を構へ雪歇み糧食運送の便宜を得るを待居たり城兵是體を見て素破敵入意屈しぬるぞ一營當て蒐散せと四千餘騎を七手よ分て闕を作り同時にさつと切て出たり官軍と疲困て戦ふべき擬勢なけれと寧飢凍て死耻を晒んよりと潔く討死せんと各備を立直し相蒐りり懸て火出るまでを戦ふたり然れども賊類新羅の馬を馳て疲足の軍に敵するとかれを唯容主の勢ひ異なるのとならず衆寡の力別あるも官軍大に敗れ死する者數百人に及びける賴義の騎男源義家と最前より陣を定めす坂戸判官則明加藤石馬允景季散位和氣政輔同谷清

等と共に選兵二百五十騎を率ゐて敵陣を砲回りの賊類を討玉ふ事殆ど致を知らず爰は備太郎
 光貞其勢二百騎許り安倍時任が七百餘騎に引包まれて吐陸討れつ見ねたる處を義家は覽
 て眞一文字に蒐入て義家茲に在り引か光貞と宣ひければ光貞大に力を得て散々に蒐立ける
 時任が勢義家の各を聞素破八幡殿の加勢どや射らきて命墜しと主を棄て親を顧みず時任
 左往に遁散たり時任味方の落失たるを見て是までと今思ひけん馬を返して義家お願合せ引
 組どぞ仕たりけるを早くも掻潜て遣り過し後面より総角を無手と掴み奥やと捉げ目より高
 く舂て弓杖五丈許り抛玉へ心歩行の兵走寄て起しも立す首を掻く此場を打棄又砲回て向
 ふを但見玉へを伯父河内冠者頼任三百騎黒澤四郎正任が一千餘騎の蒐合せて火の降る如
 く戦ひ玉ふよぞ馬を駆て其場よ乗り附け喧々河内殿今朝よりの軍よさこそ疲き玉ひけり
 暫くは休息おらせしへ義家代り進せなんと呼とり玉へを正任聞も果す八幡殿やとて一戰よ
 も及はず引退くされども數刻の苦戦に景季、致輔、爲清等討死して義家朝臣と坂戸判官則明
 と主従二人ななりぬればとある谷水に馬を乗入きて暫く息繼お在しけり將軍頼義をば勢幾
 り少く討死しては身に從ふ人ごとく如藤景通、大宅光任、清原貞成、首藤範季のみありけり斯
 くて義家は敗軍の輩浴ち來ることと頼時待玉へとも一人も見の來らず扱と首割れけるよか父

の將軍と如何せられしぞ死を討共にも思ひ定めけるそのをとして此首被首は在所を尋ね回り
 玉ひけり將軍も八幡殿の事覺えお思召て遠く落延びをし玉とす同く尋ねお在しける處よ
 義家朝臣出合ひ玉ひければ互に馬を間近く寄ては手を執交し其恙なきを祝し合ひ玉ひける
 ぞ芽出度あり此時景通すけるは勢も僅の五騎も過ぎすは敵陣近くは在陣の儀然るべあら
 ず急ぎ鎮守府には引上げあつて重て賢慮を運されしべしと申勧めしよ其義最も然るべしと
 ては父子主従七騎馬を早め玉ふ處よ宗任腹心の郎等大藤内業近二百餘騎左右の翼を張てひ
 たくと攻圍み一人も漏さじと射立たり頼義不義家を討せと防ぎ玉へは義家之父に頼義
 めらせとと矢表お立ち禦ぎ戦ふ五騎の郎等を主を落して兎を角をさるべしと四方八面お
 て回る固より一騎當千の勇士なきを業近が二百餘騎僅か七騎も蒐立られ左右なくは近侍ら
 ず唯遠矢に雨の降るが如く射たりける怒り一程に將軍の馬 頼時曾の邊りに大事の箭三
 筋負て斃れたり景通よきを見て良馬をがなと蒐回る折しも業近の弟藤三業信義家の射三ふ
 矢も甲の眞額を射られて鞍よ溜らす仰のけさよと控と落れを景道馳寄てまづ馬を奪ひ卒と
 て鞍の上なる慶打撈ふて將軍ふ奉る然るに義家の馬も流矢よ中て斃れけるを則明遠
 見て我も亦敵の馬を取て進らせんと賊軍も蒐入て此か彼かと求むるうち時具次よ斃たる

武者韋毛の太逞しと、物に打騎り此方を投して、驅來る則明斯と見るより、懸合せて取押へ
 既馬入轡殿に進せよ其代り命と其賞も賜はるごとと上帯撰で一振振て弓杖五六丈許投げたり
 けき心起も上らで死でげり則明其間に件の馬を引て義家朝臣に奉る八幡太郎これ打乗り
 玉ひ父子主従七騎將軍を中に圍で再び業近の陣に落入て捲立てぞ戰けるさしその荒夷も
 僅七騎に斬立られ右往左往通往けり爰に散位佐伯經範を今朝よりの戰に手の者盡く
 討せつれとを其身は恙なく来て圍を切抜將軍の在在所を尋けれどを不通に知さされと如何
 せさせ玉ひつるやらんと案じ思ふ處に味方の兵一人落來り一かを將軍と何の方ふ落玉ひけ
 るぞと問ふに答ていへりけると最前賊の大勢も打圍を玉ひしが従ひ進らする者數騎に過
 ざりければ行方の程覺束なくいとすそを聞經範清然と涙を流し我將軍に仕へ奉ると已に
 三十餘年今年歳積て耳順に及べり將軍の齒又鬚車も過り玉へり今や覆滅の時に當てなど
 か命を同うせさらんやと馬を立直し宗任が陣を破り入り矢庭を敵十餘人を切て落し今と思
 ひ置事なしとて郎等片山長三と突違ふてぞ死たりける平太夫國妙も驍勇にして戰上手あ
 れを常ふ小勢を以て大勢を敗り毎度勝利を得る程ふ世人呼で平不負とと號けるが敵の射け
 る矢に馬を驚されて、輿道に落たる所へ賊兵大勢下重つて起も立す預取り眞任の馬前を引

掘る既討るべかりしと國妙が外甥平經清眞任の陣に在て身に代て命を乞ひけり、
 思ふ旨やありけん直ち細を解て太刀を與へ厚く色代して、
 將軍腹心の勇士なりけりされを味方敗軍の後遠近となくは行方を尋求けれど知られされ
 を信は生害めらせ玉ひしよと天に悲しみ地を歎死出の山路のさよそは必許なくお在
 とらんいで供を仕るべけれどとて物具脱腹掻切んとせし又思ひ返しけると怎に運送
 させ玉ひつれととて國家の干城たるは身の却て朝敵の爲に亡され夷賊の軍門に首を懸ら
 れなを未代までの環瑾なり我生残りしまそ幸ひされいかよもしては遠敵を執收め源氏の耻
 を雪め萬人の嘲を解て其後冥土の供をこそ急ぎなん但し兵革の衝く所此儘めて人怪
 ひべしとて願て髪を剃削し僧侶に打扮一人元の戰場指して行く將軍と大藤内業近の剛を切
 拔玉ひて敵の襲こんとを慮り故と道をさき山中を辿り日數經てある日の夕間暮に刈田宮
 に着玉ひ暫く休らひお在し、處は茂頼入道斯ども知らず鳥海へと急ぎつゝ刈田宮の神前に
 到りしか心を立留りて明神を伏拜み將軍は父子の事ども祈り居たるが社頭より人の氣勢とる
 蹊へ何者にやと差覗ける將軍は父子を始め參らせ景運、光任、貞廣、範季等なりければ餘りの
 嬉しとに是れ如何と許り涙を落して躊躇せり將軍難なるらんと見玉へを茂頼が入道したる

にてぞありけり道といふなる姿を宣へて我頼頼頼を止め進出せずやう鳥海は開きの後何程は在所を尋ね奉りいへとぞとらよ知れぬは問若不思議の事を出来ぬるにやと存下相謀て云く敵を欺死しべしと思ひ借と此貌に罷成りいありとて且うと喜び且うと悲みて胸中を語り進らせければ將軍聞食れて出家の事聞さか似たりと雖も忠節の程深く感ざるも餘りありと稱賛し玉ひ是より主従八騎路次恙なく鎮守府より歸り玉ひけり

第三回

官軍兵を勅して鎮守府を獲し
夷賊軍を失して小松柵を落つ

却説鎮守府將軍源頼義と子息義家及び郎等六騎と共に漸く國府へ歸り其年十二月まづ國解を上りて當時の形勢を奏聞し玉ふ其文曰く

諸國兵糧兵士雖有徴發之名無到來之實當人民之悉越他國不從兵役先移送出羽國之處守源朝臣兼長無敢討賊心非蒙裁許者何遂討擊云々

日數經て國解却る達しければ群卿會議ありて諸國の官符を下され兵糧轉送の事を仰付られ又兼長朝臣の任を罷めて源朝臣齊藤を出羽守とあして共に貞任を征伐せしめられける齊藤斯く不次は恩賞を蒙りながら何と思ひてか加勢の兵を出さず刺入諸國の軍兵兵糧も到らせ

ざる程に頼義重て征伐の軍を發すと罷はず徒ら手を束て國府を守りお在ける間貞任は威勢を張りて國中を横行し人民を規畧して憚る体ありける其上權大夫經清は兵四五日討を相添て衣川の關より出張め使を諸郡に發して官物を徴しむ命じていへらく當家の白符を用ひて官府の赤符を用ゐるとありければ附附ければ官庫より収むべき物悉く賊の手に入りしより頼義彌く困窮して征伐すべき術もあかりけきを又空しく一兩年を送られける日數はに關守亦く早康平五年とぞされりける今年と頼義朝臣の任限滿て高階朝臣經重陸奥守に守せられて入部ありしかども國中の人民皆前司の威徳に服して經重の指揮に従ふ者なければ巴を得ず都へ歸られぬされお依て頼義朝臣尙又再任を乞ひ道回こそと是非とを征討の功を奏すべしと心中に固く誓ひを立て頼て腹心の郎等を使者として出羽國山北の住人清原真人光頼同舍弟武則より大義を諭して官軍に與力せしめられけるに始は左右さく領軍せざりしに漸く許諾し其年七月光頼武則子弟郎従一萬餘人を引具して遂くと參向と頼義斯と附玉ひて大お喜心を同月廿六日三千餘騎を率ゐて國府を打立ち八月九日當國栗原郡磐岡に若玉ふ此所と昔時田村磨將軍蝦夷を征するの日軍士を壁へ玉ふ依てそれより磐岡を越くとのやされを吉例といひ且路次の便りも宜しければ此處よて光頼武則に會合せしとて陣を

据られけるに武則まづ軍して待受る將軍對面ありて互に心懐を陳て喜玉と事斜まらず同
 死十六日進發あるべしとて諸陣の押領使を定めらる則ち武則の子清原武貞を第一陣とし武
 則の甥逆志方太郎橘貞頼を第二陣とし武則の甥荒川太郎秀武を第三陣とし貞頼の弟新方
 次郎橘頼貞を第四陣とし將軍頼義朝臣第五陣を打せらる此第五陣を又三陣に分ち一陣は將
 軍一陣と武則一隊と國內の官人あり第六陣は班目四郎吉美侯の武忠第七陣は貝澤三郎清原
 武道を備へける是に於て武則馬より下り胃を脱で腕死途に皇城を拜し天地に誓て言ける
 と臣既に子弟を發し將軍の命に應ず志節を立るる在り敢て身を殺すを願す八幡三所臣の
 中丹を照し玉へ若身命を惜みて死功を致さずんと必ず神鏡よ中てまづ死あんと至誠至信を
 盡しけり諸軍されを聞て皆感涙を催しける斯て其日は磐井郡中山大風澤ふ次り翌日と同郡
 萩馬場に着玉ふ此處より宗任の叔父僧良照が籠れる小松の柵までと其間僅五町餘りなり此
 日と日次宜しからざるは軍と明日と定めて陣と皆人馬を休め居たるも獨武貞頼貞まづ地勢
 を見届け置とやとて手勢少許りを引具して小松の柵近くまで進みける時歩兵等矢庭を柵外
 の民家に火を放ちければ折節山風吹落て炎忽地四方に燃廣り餘烟城中に吹捲ひて其形勢凄
 しうしかを素破や敵寄けるぞとて賊徒以の外に周章し掻出堀の上を荒上り國を作りて

矢を發ち石を飛し上を下へと騒動したり武貞頼貞の兵此体を見て我をくんと先登を争ふ將
 軍武則に宜ふやう兼てと明日と軍議を一談せしが俄に乘て當時戦ひ已に發せりとを兵と機
 を待て發と必ずしと日時を懸ばざるなり故に宋の武帝と往亡日を避けずして軍を出し常に
 功を得たりとかやいへり今ぞ好兵機あるべしと仰せければ武則對てやされけるとは談洵よ
 理りに官軍の怒宛を水火の如之其餘當るべからず兵を用ゐるの機此時に過ぎず卒やは
 陣を進められいへしとてまづ騎兵を以て要害を圍ませ歩兵を以て柵近く押寄て大軍一度よ
 餘波を揚げ追手搦手同時に一向くくと攻免たりされども此柵東南と深流の碧潭を帯び西北
 は壁立の青巖を負て要害堅固あれとさしもの精兵猛卒も共泥で支へける深江是則大伴貞
 秀等最前より此体を見て居たるが手鈍しとや思ひけん血氣の武士二十餘人を引率し敵の射
 る矢を事どもせず劍を以て岸を鑿ち鋒を杖て巖を登り忽地柵の下を斫破つて城中に乱れ入
 り矢庭に敵數十騎を討斃しけりを賊兵溜りかねしとらよなつて騒動す貞任が弟宗任と八百
 餘騎を將ゐて城外に在て攻戦ひけるが其手の者と命知らず荒夷なをを撃ども突ども少
 しも疲ます右を當り左に撐へて追つ返つ戦ふ程に官軍の前陣頗る疲て意屈の色顯れしか
 と頼義下知を傳へて五陣の軍士平眞平菅原行基源眞清刑部千富大原信助清原貞貞、

藤原兼成、橘孝忠、源親季、藤原朝臣時經、丸子宿禰弘政、藤原光貞、佐伯元方、平經貞、紀季武、安倍師方等をして宗任を攻しめらる此人等と阪東の精兵なを些も搦撃せず、其地を喚て蒐り萬死ふ入て一生を忘れ縦横無盡に切捲れとよしその宗任も支へかねて忽地發を關を靡き柵の内に引上りて暫く息を繼むける爰に又第七陣の陣頭目澤三郎武道と搦手も向む要害の處に支居たるが宗任に屬せる精兵三十餘騎遊兵とあつて襲來り面もふらず突て蒐れと武道是ぞ待處なきと兵を進て遶へ戦ひ追つ返つ揉合ひしが敵過半討れしかば引色立て見むたりける武道得たりと息をも繼せず研立確立攻し程も遂に驚へすさつと引て城戸より内に入りける武道隙さす引添ふて同く城中に切て入り彼首の役所此首の櫓に火を懸て即を作り縦横も切回りて攻立ければ真任宗任防ぎかねて城を捨てて逃行ける此時賊徒討る者六十餘人疵を被つて逃たる者員を知らず官軍討死する者十三人疵を被る者百五十人とぞ注しけり斯て暫く人馬を休め武具馬具を整へけるうちに霖雨に遭て徒に數日を送りし程に兵糧乏くありて軍中又難儀に及びける磐井より以前の郡と昔宗任の指圖も從て官軍の重を遮り奪ひければ士卒彌々餓疲るゝにぞ將軍兵數千を分て一手と栗原郡の賊徒を追捕して糧食運轉の道を開らしめ一手は磐井郡仲村の地に遣とし糧米等を刈て軍糧も充て玉ふ

怒りし程に又十餘日を過しける真任官軍糧乏しく兵士四方に出で營中の勢衰しと聞いでや此處に乗て打破れど則ち九月五日精兵八千餘人を引率一地を動かして寄來る武則斯と聞將軍の陣前も出て就一やとせけると真任謀略を失ひ自ら其首を捧げ來る條賊に味方の大幸ありと喜勇で言とせければ頼義聞玉ひて宣ふやう今官軍四方も散ちて營中兵數の所へ忽地大軍來襲ふ敵の勝んと三尺の童子と雖これを知りかん然るに和服却て彼謀略を失ふとやとるゝ事其意を得難くと仰せらる武則畏てさんい味方と敵地も入ての軍あり其上兵糧常に乏く軍議餓も困むと廢くなりされを敵若し險を守て進み戦とさるとさそ我軍久しきに堪へず息屈して漸く落る者いべし其機も臨で大軍攻寄ある一人を殘らず討るべとと真任よれを察せず進來て戦はんと欲す是自ら其首を擧ぐるあり官軍の勝利疑ひなくいと理を盡してすければ頼義大に喜び玉ひ我も亦爾思へりさらんを戰の準備せよとて陣を常山の蛇勢も立て敵速に寄せよと勇を奮て待其ける蒐る處へ真任混押も寄來りまづ陣を作り矢合せを始めけるが互に待設けたる事なれを早入乱をて午の刻より酉の刻まで追つ返つ開きつ閉つ火花を散りて戦ひけるが真任遂に打敗られて散日お崩れしかた官軍勝も乘て走るを追ふて磐井川まで至りけるも賊徒の道を遁惑ひけん行手の津りを失ひ追詰られて高き岸より

轉び墜つるもあり刺貫れて斃るゝせありて戰場より川の邊りまで射殺され切伏らば一
賊の骸は累々として路を横とれり頼義武則に宣ひけるを夜暗けれどと此勢を外さず攻
ず心賊勢又振ひきん和服速に引添ふて尾撃せられよ我も追附積くべいと命を玉へを武則
畏つて精兵八百餘人を將ひて直ちに追撃一別に遣兵五十人を分て倫に西山の間道より進
ませせて貞任が陣屋に火を掛させ燦の立上るを見て三方より鯨波を揚て一度に吶賊で攻立
けれを陣中上を下へと騒動し孰を敵とも辨へかねて同士討をぞしたりける貞任此處も溜
り得ず這く陣を打棄て衣川の關に遁入りける

第四回

衣川の詠歌能く危急を免れ
厨川の舞踏却て没落を買ふ

將軍頼義朝臣と第五陣の兵を率ひて九月六日午の刻高梨の宿若玉ひ武則に對面せられ
賊徒敗績の模様を委細に聞召れ斜ならず喜び玉ひ其勳勞を深く賞賚せられ卒此勢に乗
て衣川を攻むべしと宣ひ頼て軍の手分あり一手と清原武貞押領使として千餘騎を將て關道
を攻め一手と新方次郎 橘頼貞千三百餘騎にて上津衣川の道を攻め一手と清原武則二千餘
騎を引具して關の下道を攻む將軍頼義と義家頼任を前後に立させ自ら中軍に陣して打せら

る是日未の上刻より軍始り成の刻に至るまで陣入り亂れて責戦ふ互に射違ふる矢は秋の
野の薄より繁く打合ふ太刀と夏の日日電よりも激しく孰れ際ありとを見ぬざりける元來
此城隘路險阻なると崎嶇の固に過ぎたれば一人敵を拒ぐととと萬夫も進むと能くす恁る要
害ある木樹を伐りて隙を塞ぎ岸を崩して路を斷ち加ふるに此頃の霖雨みて加美河衣川の二
水共み洪に溢れたれ中々に容易落つべしとも見ぬす恁る官軍死する者九人統を破る者
八十餘人に及びける斯て其日も暮ぬれを關の下道より進みたる武則馬より下て竊に岸邊を
打回りつゝ家子久清を呼でやされけるは彼見々兩岸に曲木ありて其枝垂れ茂りて河の面を
覆へり汝輕捷ふして飛超を好めり日頃の伎倆を顯とすと此時にあり能く彼處を渡つて倫に
賊の陣屋に入て火を懸けよ賊火の起るを見を軍を合て驚き走るべし其時我一擧に攻上らと
關を破らんと必定あり汝能せよやとやせしかを久清欣然として死生共命を隨ひひひなん
ぞとて快く領掌し早は暇を賜玉へとて身を蹴へして出去りけるが我も同き者三十餘人を
語らひ具して彼の岸近く寄り頼て久清垂れたる枝を牽き葛を纏ひて猿猴の跳梁するが
如く念なく對の城脚を越え渡りて兼て用意の藤繩を橋懸けて三十餘人を渡しける久清
忍やのみ内に入て見れ此と大藤内業近の柵なりけり折節業近を始め家子郎等共み本陣



義家衣川
子真任我
追不圖

に集りて柵中は妻子下婢のみぞ居たりける久清等時分と好きごとど打喜びて火を放ちたるに
 恰も好し一陣の烈風颯と吹き下して炎四方に飛散たれを看く役所とと一面に火となり業
 近が家族之煙に捲れ炎に焚れて泣彷徨ひける貞任遙に燭を見て扱は城中に内應の者あると
 覺ゆるぞ早し防戦の用意をせよやと周章騒ぐ處へ久清が兵共四方に馳散て狼狽迷ふ敵共
 を追立し切て回りければ忽地七十餘人を討れける三方の奇手此機に乗て乱杭を乗越ぬ道
 叢木を掻退けて潮の如く乱れ込み縦横無盡に薙立つれを貞任兄弟と心ならずも搦手より敵
 とに成て落行きけり義家と加美川の北に兵を伏て落つる敵を討留んと待玉ふ折柄暗夜され
 を貞任斯とも知らず馬を早めて打過ぐるを義家星光も覺て貞任ありと見成し玉ひは弓
 に片手矢さげて追蒐けつゝ其處へ遁ぐるを貞任と見しと解眼か返し合せて勝負いへと宣ひ
 ければ貞任を義家と知て今は遁れぬ處と覺悟一やをら馬を静めしかば義家大奮りて「衣の
 たてと統ひぬけり」と遊むしけるよ貞任馬の鼻を引返し取敢ず一年を経し絲のみださのふる
 しさに」とぞ附たりける義家これを聞玉ひ夷心お飽しくを仕りけるかな其志と感せず
 して一矢に射落さんと不愍おも亦無骨され好今一日命助けたりとぞ彼日あらす首を授けな
 んと思されて番ひたる矢を差外して引返し玉ひければ天晴大將の必操やとぞ感之思ひ

とあかりけり貞任と不思議の命助のりて厨川の城に橋籠り舍弟宗任并に巨理權太夫經清は
 鳥海の柵に籠り四郎正任と黒澤尻の柵に籠り散位平孝忠金師道安倍時任同貞行金依方等
 は大麻生野及び瀬原の二柵に入り皆要害堅固に官軍の追撃を防ぎつれども七日八日九日十
 日の四箇日大麻麻生野、瀬原の諸柵は累に官軍に攻め落され時任、孝忠、貞行、依方等貞任腹
 心の郎等或と討れ或と差遣て死したりける同き十一日雖明も頼義大軍を進めて鳥海に向は
 れける宗任經清等と頼み切たる黒澤尻、大麻生野、瀬原も落ちたりと聞信と此因兵を以て大
 敵も當らんと叶ふまゝト急ぎ厨川の手と一緒に成て敵を待べしとて城を棄て道の休めて落
 行けり恚れを頼義は直ち鳥海の柵に入て暫く人馬を休め玉ふ柵中のある役所は酒飲
 十樽ありければ士卒大に喜び我先飲んどせしを頼義制し玉ひ必ず浮と口を附べからず恐
 くは賊徒毒酒を設けしも計り難しと宣ひしに中一人二人我等まづ試みんとてこれを飲た
 るに別條ありしか我もくと快くこれを飲み舌鼓を鳴しつゝ皆萬歳を祝しける頼義、
 武則も宣ふや頃年鳥海の柵に名を聞つれども其體を見るを能とさりしが今日始めて此に入
 るとぞ得て稍満足せり是併ら皆和殿が忠節あり因てあり和殿吾顔色を如何見玉ひしと仰せ
 ければ武則畏つてやされけると將軍多く王室の爲に節を立玉ふ而も風も極り雨も沐ひ

四州

甲冑蟻虱を生じ軍旅の苦で後已に十餘年天地其忠を助け軍士其志を感ず是を以て既往
 風を望んで濱の走れると宛を積水を決するが如し是皆將軍武徳の致す所ありて愚臣武則之唯
 鞭を撻して相従ふのみ何の殊功かいへば但將軍の形容を見進らするに前ふと幾十の苦辛の
 爲に殆ど白髪とあらせ玉ひつるが今之却て半黒みて見ぬさせ玉へり若し厨川の柵を破り貞
 任が首を取り玉ふものあらむ髪髪悉く黒みては容貌も肥ぬさせらるゝあるべしとさせば
 將軍あれを聞召れ否とよ和殿子姪を率ゐ大軍を發して堅きを破り鋭を執り矢石の道に當り
 陣を破り城を拔た玉ふと宛ら圓石を千仞の谷へ轉るとり如く其勢ひ禦ぐべからずされに因て
 吾節を送るとを得たるなれ和殿決して功を讓るとあかれ但し白髪の却て黒くなれる事と吾
 もふれを然りとせよと宣へと武則深く心に感佩し有り難き大將のあどぞ思ひけり斯て義家
 と二千五百餘騎を率て正任が籠れる和賀郡黒澤尻の柵へ押寄玉ひしが敵と八幡殿の攻來り
 玉ふと聞て夜の間に何處ともなく落失けり又家任、則任が籠れる越前、比與鳥の二柵へは修
 理進景道、清原武貞向けるが此二柵と一攻に攻落されて家任、則任も這くお遁失けれを去
 來敵の鷹病神の醒ぬ間に厨川をも攻よとて同き十四日頼義三萬餘騎を引率して發向あり翌
 十五日の酉刻に厨川に着玉ふ此柵と堀戸の柵と間七八町許りふして西北は大澤を越らし東

二十四り四州

雨と大河を帯びて岸と三丈有餘を壁立し瀝るべとも見ぬす其内お堅固なる柵を結ひ柵の上
 ふと數多の樓櫓を掻並べて選たる射手數千騎されを固め河と柵との間に隙を掘り隙の底
 へと太刀劍を植堀の内にと磐石を幾箇と置く積貯へ又大釜數十に熱湯を湛へて遠き者は射
 弓を發て射倒し近き者と石を投付て打挫き柵下お薄る者と沸湯を建して汝を殺さんとぞ精
 へたりさる程に城中は官軍の寄たるを見て高檣の兵共聲くお呼はりけるはさては將軍源
 頼義朝臣追討使として遙く此地に下向し玉ひつれども安倍殿の軍威お敵しおねて年來紛骨
 を致さるゝ條は痛えまゝおまへさらば今一戰して冥土の話柄ともし玉へかしと扇を開き
 手を揚げつゝ笑ひ興じて招きけるが尙も奇手を欺かんとて容姿優れたる女數十人櫓の上お
 登つて綾羅の袖を翻し數回舞奏でける頼義此物を見て激怒を玉ひ憎き敵の舉動かな仮令
 幾月幾年を経るども暫て此城を攻落すべしと屹度思ひ玉ひける左右とらうち其夜も明とな
 れ十六日の卯の刻より軍始り終日通夜入替く攻戦ひしが敵少しも弱たる体なく益々積
 弩を發ち矢石を飛して奇手を懸惱それ官軍死を致すもの六七百人お及べり頼義屹と思案
 し玉ひけると此城期様お攻てと唯軍勢を討そのみにてこれを抜んと難かるべしとて十七日
 比未の刻ふ士卒お向て下知せられけるやう我今火攻の法を用ゐんと欲す汝等近邊の村落お

五十四

ひけ紺の段だら染の牛綱登繰りゆらりと打跨り退兵五十餘騎を引具し閑くと乗出したり舎
弟比浦六郎重任も威りしく鎧ふて相續てぞ出たりける貞任よれを見て嬉しげあすしけるは
日頃と忠義を専とし武勇を宗としつる一族郎従も命の際にと思を遣れ臆病神ふ誘われて
其に討死せんといふ者あし然るに和服骨肉の親を重下續きたるよと神妙なれ我城中にて
兎も角もなるべしと覺悟せしがいやしく同じ死ぬるものならば頼義が陣に切て入り差違て
ことと思ひ定めて斯と打て出しされ和服も是と義家の陣も突入て彼と死を共に一玉へ構
て仕損じ玉ふなよ時刻移らば惡ありあん疾うとすければ六郎聞て兼てと一緒ふと思ひしが
此説理りと存いへむ今より義家の陣に向ひいべし今生の拜顔もあれを限りと覺ゆいとて落
る涙を鎧れ袖に受けつゝ兵二十餘騎を引分けて西と東に分れける貞任馬を駐て暫く後影を
視て居たるが屹と思ひ返し三十餘騎を前後に立せ大太刀を抜き頼義の本陣自寛て窮地
にぞ駈たりける官軍も貞任と見てげれと我討留て功名せんと群を懸て挑みけるが元來強勇
の暴夷あるよ必死を極めし事されと輩ども突ども空も萎ます益う狂り狂ひ回つて新方太郎
頼貞、權太郎、藤原茂頼等も荒立られ支へかねて見ゆたりけるが貞任も最前よりの取
に三十餘騎も今と七騎に討なされ我が乗たる馬も大事の所よ矢數多負て駈れまると歩立と

六十四

あり尙は頼義に近付するらせんと進む處に出羽國住人金澤十郎と名乗て行手も大手を真げ
て立塞り遣じとことと扣へたり貞任斯と見て物くーや此小冠者がと引居て抛げんとせしが
磐石の如くにて動かされと持たる太刀をかりりと打棄て曳やと許り組頭で上より下にさ
り稍時移るまで都合ひけるが十郎力や勝りけん郷よ貞任を組布て既に首を搦んとせま折り
何處とせま流矢來て十郎が頼を忝巻賣て射込たりさしもの十郎も痛手に力衰へて手の
緩たる所を貞任下より曳やと列返して上帯無手と搦掴み弓杖五六丈抛たりけり最前より落
合んと堅津を飲で扣へたる藤原季俊、物部長頼ばらくと駈寄て貞任の左右より組附腰刀
抜きて脇指の外よりぐさど刺貫せよ貞任之無念の齒齧をみし二人を引放して抛んど仕たり
けれども楚と刃を入れて動かぬを暫く揉合ひて居たる處へ大勢折重つて手鎧を以て刺介し
透に擒にして大楯に載せ六人してあれを昇頼義のほ前居たりける貞任今年三十四容觀魁
偉皮膚肥白よて身の長六尺有餘腰の圍七尺四寸あり頼義其罪を責玉ひけれども痛手に堪
ねて言と能はず一面して死たりけり比浦六郎重任の兄貞任も別れてより義家の陣も切て
入りしが忽地義家の矢先よ懸て馬より落たる處を官軍駈寄て搦取り頼義のほ前に引居ける
に傍に兄貞任の骸のあるを視て早討れけるよとて涙を流したりしが同志感よて斬れけり

爰に貞任の一子千世童子とて今年十三にされる容貌美麗なる少年父の最後と聞我も路共
 と華麗に鑑て柵外に切て出群れる官軍の中へ呐喊んで荒入り年にも似ざる勳さしけるが武
 則に生擒れ是亦頼義のほ前に引れしけるに父の軀も叔父の屍も其場に横りあるも目を眩
 魂も消て淺ましく思ひ居るを頼義は覽て怒なく思されまれば清さんとし玉ひしと武剛
 匪のてすされけるに此兒少年と雖も父祖の風あり後必ず禍をなさん將軍小義を思ふて巨害
 を忘れ玉ふべからずと諫め進らせしを頼義尤も同ト玉ひ願て首を刎させけり斯て頼義
 城中入て見玉ふに被羅を衣金翠を粧ひける美女數十人烟お交つて悲み泣き居たれと恐
 く収へて軍士お賜ひけり是より先き柵の破るゝ刻七郎則任が妻今と斯とと覺悟して夫に向
 ひ此城を早程なく攻落さるべきあてし君のほ最後に後て敵の辱を受けんよとて軍先だつ
 て冥土に赴き蓮の臺の半座を分けて待はべらんお君を懸懸して後に晒を晒し玉ひといで
 くきて今年三歳に於る男兒を搔抱き二の關の上より身を跳らし深淵に飛入て貞任とわら
 としけること哀れなり宗任の城兵の落失たるを見て所詮立直して軍せんと覺束なしされど
 を此儘よて討死するに誠に口惜き次第なり如何もして遁るゝ丈は遠くて頼義父子は内一人
 なりとも討留て此盤懷を尋すべしと竊に城を紛れ出深泥お飛込み水底之潜て不思議に命助

あり暫く諸侯お隠れ居たるが餘類は穿鑿厳く他國へ遁出んとすききと國司郡司道くを誑さ
 守て洩出べき様もなし宗任此曉暎を見て驚ては我素懐を遂げんと中々思ひ討らず折角苦辛
 して城を落延び今日まで在しを又擒めせられなを耻辱の上の耻辱あり聞が如んを義家と寛
 任の人なりといへり行て降参を乞ひ時節を待て又陰謀わらんと料簡を定めて鎮守府投して
 往向ふ折柄道にて舍弟則任が髪を剃て法師妻となりて往くに出逢ぬ兄弟思ひ掛けぬ對面
 なれを大お喜び借何處へか赴玉ふ則任さきと一門の内降人に出たる者と子細かく頼義でい
 と承くりつれを則任も一圓降参して世の分野を見をやと存せさては恁様おありて只今鎮守
 府へ罷越す道にていといひけれを宗任聞て我も同じ思慕よてありけりとてそれより道すの
 ら物語しつゝ程なく義家のほ館お着ぬ宗任まづ門外にて太刀刀を放棄庭上へ降参し是は安
 倍宗任同則任にて自ら前日は惡逆を後悔し翻然改悛して降参任のい仰ぎ願とくと舊罪を赦
 免せられ一命をば助けあるよ於ては身を委諸代給仕の奴とありて忠勤を願み高恩の萬一に
 戦ひ奉り度存いど他事おさやけれは義家暫く思案せられしが乾と思ひ玉ふ所ありてや微妙
 くも來る者かお其義ならを我汝等の一命を予賜つて得さそべし安心せよと宣ひて二人を
 具して頼義のほ前お出で種々宗任、則任の助命を請はれしのを將軍聞召て則任と鬼も角と

むき宗任と貞任も劣らぬ者を命助けんと思ひも寄らば疾引出して首を刎よと宣ひけるを
 義家と重て色々に申請ひ玉ひける程に漸く許容ありしにぞ義家言ふ甲斐ありけれど喜び
 思召宗任を留館に留め置れける這首彼首に忍び居たる末の一族も此事を聞宗任だにも赦
 免せらるゝものを我輩の命召さるゝ程の事と決してあらざるとて五人十人位宛打違立て日毎
 に降人に田たりける斯て康永六年二月十六日安倍貞任、同重任、藤原経清の首三級京都に上
 り着たれを京中の老若男女と奥の暴夷の首と如何なるものとて見物に出ける程に車轂を
 擧人肩を摩りて道を争む一足なりとも前に出て見とやと奔りた合りける扱も道回貞任が首
 を持て上りしと舊貞任の従者にして今度降参したる者なり首を獻せざる時楠ありければ如
 何任るべたどすせしし使者藤原季俊物部長頼二人何事なく汝等私に用ひる楠あるべし其を
 以て梳れと命せしかを其者頼て楠を出して貞任の髪を掻上げつゝ涙を流し鳴咽かへりて
 申けるを吾主存生の時とこそ仰ぐと高天の如く千代までを榮お在さんどよと思ひけるよ
 運盡て名もなき者の垢つきたる楠めて新く梳り進らするやうある汝等事あるべしとて
 飯初も思はざりけりとて悲哀を堪れを其場の人とも優したる操やと皆鍾の袖に涙を落
 ちける斯て貞任、重任、経清等の首共と形の如く大路を渡して使の應にぞ交しけるる程に

鎮守府將軍頼義、藤原武則等は時しを咲香ふ春の花と共々喜の眉を閉さつゝ進んで都に上
 りけると誠に芽出度見物なり同廿五日除目行これ勳功を賞し玉ひ藤原朝臣を拜して正四
 位下伊豫守に任玄太郎義家を従五位下出羽守とし次郎義綱を左衛門尉とし武則を従五位下
 鎮守府將軍とし首を獻する使者藤原季俊を左馬允とし物部長頼を陸奥大目とし玉ひ其外勳
 勞の淺深に依て賞典に預かりま者枚舉に違なし勳賞の漸あると天下の人々皆以て榮とせざ
 るよとありける却説降参の者共と一門の大名に一二名宛配分して其等に贈て慶賀せら
 れけるが獨り宗任と義家其武勇を惜み玉ひて郎等にせられけり或る時若殿上人宗任を見ん
 どて義家の館へ至て梅の花一枝を出して是と何とす花ぞと問ひ玉へば宗任畏て取敢せ
 我が國の梅の花と見つれども大宮人といかやいふらじ
 どぞ贈出けれを仕たりくと賞稱へてぞ歸り玉ひしどかやいへり宗任と外歸服の色を願す
 ど雖も内ふと復讐の心を抱きて其間を窺ひけるよ其頃義家忍で通ひ玉ふ所あり今日も狩野
 の歸るさより直に往き向ふべしとて道より家人を歸され女車お打乗り宗任一人具して夜
 半をのりお忍びて打せ玉ふ宗任是ぞ好機會ありと太刀拔を心めて窺ひ寄り車の内を覗た見
 れを義家少しも用心の体なく快氣に眠られしかを宗任其大膽お感服し斯る勇將を計り申さ

れを義家少しも用心の体なく快氣に眠られしかを宗任其大膽お感服し斯る勇將を計り申さ

ん事思ひ懸べた事よわらむ向後と努む害心を存せべからむとて夫よりと報替の念を翻し無二の忠勤を屬みけるとなん其後又宗任を具して宇治關白頼通公の館に伺候せられて何れと物語し玉ひける時殿下仰けるは年毎の軍おて暇とあらざりしならんが陸奥は名所多き國なれを其とも見てしか杯仰ありしかを義家畏つてさん候宜ふ如く只管合戦のみよて風雅を尋ぬるの間は待らば候ひしが勿來の關と申す所を過り候ひし刺花の散るを見侍りて餘りふ面白く覺ゆ候ひけれと嗚呼にも

吹風をなまその關と思へとも遣もせむらる山櫻かな

こ任て候ひけると宣ひけれと殿下感歎し玉ひて只武術のみあらむ文道も長下ける候とて大由賞翫せられけり斯て尙は頼時貞任退治の事と語り聞ゆ玉ひしを博士大江匡房物想ふ聞てこても器量勝れし大將なれされども未だ軍の道にと通せざるありと密に獨り申されしを宗任聞て無念に思ひ主のすべりて罷り出られしを見て箇様の人が云くと勅り申候宗任引捕へて其罪を責め申すべきかと致圍て告げたりしに義家敢て怒れる体もなく制し玉ひ陸奥組骨ぬるべからむ實は彼の人の申されし事尤ありと深く其言を感ず匡房の退出を待て殊更に會釋し玉ひ後に之戀ふ其門客となつて兵法を學び玉ひけるとぞ

第六回

武衛家衝亂逆を企て 義家義光征討を務む

却説出羽國住人清原真人武則は源朝臣頼義に加勢して貞任一類を誅伐したる功に因て始て從五位下に叙し鎮守府將軍に任せられ貞任の跡を領えて奥六郡の主となり威勢遠近に及ひける其子武貞父の遺跡を繼ぎ嫡孫眞衡が代に至て威更父祖に越て國中に肩を並ぶる者おしされども強て僻事を行とす只管國宣を重し朝威を忝あらず是を以て境内靜謐にして弓矢箱を藏まり劍と刀室に納れ然るに眞衡嗣子なかりけれと海道小太郎成衡といふ者を養ひて子とせり未だ若くして妻おかりしかを遠近よまれを求めける爰に常陸國の住人多氣權守宗基といふ者あり其娘頼義朝臣の子を生る事あり此の頼義昔日貞任を討んとて下り玉ひし時旅の飯屋にて彼の娘と逢ひ則ち女子一人を産せけるを祖父宗基册記養ひて人となしたるあり眞衡此子を迎取て成衡の妻とせり此時故將軍武則の甥ながら舞えてありける吉彦秀武も喜びの祝申さんとして朱の盤お金堆く積で自らこれを捧げて庭上に跪き長久しく待居たるが折節眞衡と持僧にて五條の君といへる奈良法師と基を打入てよれを知らむ秀武老の力疲て苦しくなりけれと心の中に思ふやう我は正しき一家の者あり果報の勝劣は依

三十五

て斯く主従の如き進退をなすと雖も嘗て武則が頼義朝臣を助けて其任を返治したる刻にと
 我其第三陣の押領使を奉つて功名をなせり今たとひ勢落ち年老たりとも其衝賊人進を
 知らず速く出て逢へきに久く見入れず其身の榮華を誇て古老を侮ると安からぬ事ありい
 で此上と思ひ定めどて持たる金を庭上に擲散し衛と門外を走り出敷多擲せたりける飯酒を
 習従者どもも與て長櫃杯をを門前に打棄着背取てとろひ郎等も皆物具させて馬を早めつ
 ゝ本國投して歸りけり眞衡圍碁打果て秀武を尋ねるに箇様として罷りぬと聞大いに怒り
 憤り老猪の舉動の亦得こと此儘を聞くと急ぎ彼奴を攻よとて忽地諸郡に相觸れて兵
 を催しける斯と聞傳て諸方に住居せる郎等思願の聲と申すも及んず都くの者共我後れじと
 馳參じける程に兵雲霞の如く集れり日來穩み目出たかりつる六郡も忽地種接の區とな
 り私財を山野に持運び老弱東西に泣迷ふ哀れありける分野あり秀武出羽に歸る道とがら思
 ふやう我が進退を聞ば必定眞衡怒て日あらを襲ひ來るべし彼之大勢なり我は勢よとなと
 劣れり攻落ささんと程近あるべし好く奥州の清衡、家衡を語らひて眞衡も當るべしとて願
 て心利たる郎等を使として二人の許へ遣しける此清衡、家衡と異種同族の兄弟あり清衡と
 互理權太夫經清の手にして經清、貞任に慕して討れし後武則則義の命を以て經清が窮婦と
 迎へて妾と一其腹に二人の子を生せたり兄を武衡弟を家衡といふ斯て秀武の使二人は許す
 至り申けると此回秀武と眞衡との仲も思ひ掛ぬ御事出來て眞衡六郡の兵を催して我方の
 寄來候是と我一家の事にて候へとと御邊等亦同族一族めてありながら彼も斯く從者の如く
 遇するよと後ら思ふ幸ひ日に我許へ寄來るなり御邊達其財も入替て彼が妻子を殺
 り家を焼拂ひ玉へ誠に得難き機なり天道の與へ賜ふ時なり眞衡妻子を取られ住宅を焼拂ひ
 れぬと聞て我等の清を眞衡も獲らんととらうと憂ふるに足らぬと首をせけれと清衡、家
 衡大に喜び日來の遺恨を盡すべし時と至りぬとて頓て勢を起し眞衡が館へ襲ひ往く途に
 て鹿澤郡白鳥村の在家四百餘家を焼拂ひ眞衡斯と聞て大に驚きさらん先本所の敵を討くべ
 しとて逃ぐり馳返る清衡、家衡又此由を聞所詮敵が勢も當るべからざとて未だ取とる法
 ゝ軍を引てぞ歸りける眞衡両方の戦を仕得きして爾に憤り此上と重て兵を集りて我
 本所をも固めさせ又秀武をも攻むべしとて専ら軍備は取あかりけり倦ける折柄永保三年六
 月源義家朝臣陸奥守兼鎮守府將軍に任せらるるに遙く奥に下られける眞衡まづ合戦の事と聞
 て新司を慶應せん事を營ひ三日厨とて日毎に上馬五十四其外數の珍寶を奉りける斯て國司
 慶應の事畢つて則ち本意を認んが爲る秀衡を責んとて軍を分ち一手と我館を固り一手と自

四十五

て斯く主従の如き進退をなすと雖も嘗て武則が頼義朝臣を助けて其任を返治したる刻にと
 我其第三陣の押領使を奉つて功名をなせり今たとひ勢落ち年老たりとも其衝賊人進を
 知らず速く出て逢へきに久く見入れず其身の榮華を誇て古老を侮ると安からぬ事ありい
 で此上と思ひ定めどて持たる金を庭上に擲散し衛と門外を走り出敷多擲せたりける飯酒を
 習従者どもも與て長櫃杯をを門前に打棄着背取てとろひ郎等も皆物具させて馬を早めつ
 ゝ本國投して歸りけり眞衡圍碁打果て秀武を尋ねるに箇様として罷りぬと聞大いに怒り
 憤り老猪の舉動の亦得こと此儘を聞くと急ぎ彼奴を攻よとて忽地諸郡に相觸れて兵
 を催しける斯と聞傳て諸方に住居せる郎等思願の聲と申すも及んず都くの者共我後れじと
 馳參じける程に兵雲霞の如く集れり日來穩み目出たかりつる六郡も忽地種接の區とな
 り私財を山野に持運び老弱東西に泣迷ふ哀れありける分野あり秀武出羽に歸る道とがら思
 ふやう我が進退を聞ば必定眞衡怒て日あらを襲ひ來るべし彼之大勢なり我は勢よとなと
 劣れり攻落ささんと程近あるべし好く奥州の清衡、家衡を語らひて眞衡も當るべしとて願
 て心利たる郎等を使として二人の許へ遣しける此清衡、家衡と異種同族の兄弟あり清衡と
 互理權太夫經清の手にして經清、貞任に慕して討れし後武則則義の命を以て經清が窮婦と
 迎へて妾と一其腹に二人の子を生せたり兄を武衡弟を家衡といふ斯て秀武の使二人は許す
 至り申けると此回秀武と眞衡との仲も思ひ掛ぬ御事出來て眞衡六郡の兵を催して我方の
 寄來候是と我一家の事にて候へとと御邊等亦同族一族めてありながら彼も斯く從者の如く
 遇するよと後ら思ふ幸ひ日に我許へ寄來るなり御邊達其財も入替て彼が妻子を殺
 り家を焼拂ひ玉へ誠に得難き機なり天道の與へ賜ふ時なり眞衡妻子を取られ住宅を焼拂ひ
 れぬと聞て我等の清を眞衡も獲らんととらうと憂ふるに足らぬと首をせけれと清衡、家
 衡大に喜び日來の遺恨を盡すべし時と至りぬとて頓て勢を起し眞衡が館へ襲ひ往く途に
 て鹿澤郡白鳥村の在家四百餘家を焼拂ひ眞衡斯と聞て大に驚きさらん先本所の敵を討くべ
 しとて逃ぐり馳返る清衡、家衡又此由を聞所詮敵が勢も當るべからざとて未だ取とる法
 ゝ軍を引てぞ歸りける眞衡両方の戦を仕得きして爾に憤り此上と重て兵を集りて我
 本所をも固めさせ又秀武をも攻むべしとて専ら軍備は取あかりけり倦ける折柄永保三年六
 月源義家朝臣陸奥守兼鎮守府將軍に任せらるるに遙く奥に下られける眞衡まづ合戦の事と聞
 て新司を慶應せん事を營ひ三日厨とて日毎に上馬五十四其外數の珍寶を奉りける斯て國司
 慶應の事畢つて則ち本意を認んが爲る秀衡を責んとて軍を分ち一手と我館を固り一手と自

ら勢を率ゐて出羽國へぞ發向せり清衡、家衡これを見て素破其虚を拵て眞衡の妻子を擒む
 せよとて兵を催し陸奥に越ぬ入りぬ此時義家の郎等参河國住人兵藤太夫正經、伴次郎儀
 仗助兼輝、眞相具して當郡の檢問に來り眞衡が館近く在けるを眞衡の妻使として言とせけ
 ると夫よて候眞衡思入ぬ事より秀武と確執を生じ兵を率ゐて彼の方へ行向へる間か清衡、
 家衡我空虚を衝んどて襲來り候但防ぐべき軍兵とこれ有り候、女人の身なれを將帥の
 器よあらば願くと來て勢を指揮し且うと合戦の分野をを見分して國司に聞ゆ上げ玉くれか
 しと申送りけれと正經、助兼異議なくよめを領掌し頼て軍の準備して相待つ處へ清衡、家
 衡寄來り鯨波を揚げて攻んどせしが城中備へ嚴しくして容易か蒐りかねて見ゆしつと又も
 や兵を引て立去りける却説將軍義家朝臣は鎮守府に入り玉ひ府の政道を理められ扱清家の
 輩私怨を散せんが爲に國を騒し民を苦しむる條其罪輕からず清衡、家衡は事故業にして其
 本は眞衡、秀武に在りといへをまつ此兩人を召て理非を匡し若違背する者あらと蛇度罪科
 に處とべしとありて頼て兩人を府に召れ宣ひけるやう方々は私怨を以て攻伐を事とし且つ説
 事雙方共に朝意を揮らば國民を苦ましむる條これを匡むを御邊等共よ罪科たるべし且つ説
 家衡國の守に任せられ再び下向致しつれと方々は喜ま好むるを以て常に對面し昔日を語り

今日を談じて旅情を慰めむとと思ひしと圖らざりき一族の親を忘る疾視の仇を結び玉とん
 どと今より真心に歸り新怨を棄て舊好を温め永く義家の忠告を容る玉ふべし若左などして
 恨を強し強て闘を起し玉は已とを得ず官符を賜て殊戮を行ふべし事果して茲に玉ら
 を各と名家の榮譽を汚し祖先の忠勳を辱し玉ふかり誠口惜き次第あらすやと理を責て
 宣ひけれを眞衡、秀武俱よ感涙を流しては説諭で承とりし清原の一族家を起し威を耀す事
 え皆是前將軍の恩澤ふあらざるえかし何條一朝の怨よ昔日の鴻恩を忘れ今日の願合に背さ
 りすべきやとて眞衡秀武忽地に和睦したりけり然らと此上へ武衡、清衡、家衡を召すべし今
 使者を遣はされけるに家衡は所存ありけん參候せず清衡は子細なく参りけれとも武衡と眞
 衡の事ありとて慕し返辭もせざりければ義家深く憤り玉ひ其義ならんをまつ家衡を伐
 つべしとて親ら軍勢を引率して出羽に打越家衡が籠れる沼の柵に押寄せて闘を吐と作りて
 矢合せの鏑を射たりけるよ城中も待設たる事あれを同く鯨波を合せ城戸をまつと開て湖
 の湧が如く呐喊で切て出雙方相蒐りに掛て一陽一陰火出るまで戦ひけるが奇手と長途よ
 疲きたる兵なり城兵と兼て期したる戦なると逸を以て勢を待つの勢ひにて義家の軍士へ
 かねて引退さぬ城兵と長追無益ありとて只勝鬨と三度揚げて引返しける武衡國司の軍利か

ありし由を聞勢を振て家衡の許に來つていふやう和殿一手にて一日たりとも義家程の大將を撃御けしと獨り和殿一人の名譽にわらず武衡の面目なり今に於て我を彌々同心して屍を原野に曝すべしと且うは喜び且うと勇みてやければ家衡も受喜ふと限りなし武衡重て言りけるは此柵と大敵を引受て長く戦ふべき處もわらず金澤の柵よと究竟は要害あり宜く此處を築て彼處も移るべしとて二人相具して金澤の柵も楯籠りける義家と初度の合戦も味方利あらざりしかを安からと思召て軍議を凝し玉ひ頼て其年七月三日諸軍を率ひて仙北郡金澤の柵に到着し追手搦手を打圍で鯨波を上げたりけを城中と同音も聞合せて早雙方法詰引詰射蒐けたり矢叫の聲太鼓の音と天に響き地も轟然て夥多あんといふ許りなし斯る處に相摸國の住人鎌倉權頭景成が一子權五郎景政生年十六歳と聞ひし少年力豊馬上戸打物雙なき達者にて毎度敵を驚惱せけれと未だ一所も手を負す今日も叔父鎌倉權太夫道が陣に在て最前より敵數多討取りけるを敵將鳥海彌三郎此体を見て必憎き小冠者が早かみ彼を拾置を多くの味方を失之んいで射取をやとて四人張あ十四束三伏忘るゝ許り引たり絃音高く標と切て發てを矢所を違へて景政が右の眼を射て首を貫て背の鉢附の板も射付たり尋常の者なりせむ忽地も死とへきと景政然とも凄まじき矢を折懸たるまゝにて答の矢を

射て鳥海を射落し其首を取て閑々ど本陣に引退さ馬より下り背を股て景政手を負たり誰か此矢を抜て給いへどて仰さまも臥たり同國の勇士三浦平太郎為次我抜て進らせんとて類貫を穿しまゝめて景政が頭を踐へて矢を抜かんとす景政臥ながら太刀を抜て為次が首指を執へて揚さまも突んどと為次驚き道と如何なと斯とし玉ふぞといふ景政がいふやう月餅の中りて死とるゝ兵の望む所なり争で生ながら足にて面を踏み事とわらん如く和殿を敵として我此ふて死なんふこといふ為次道理と思ひしのを舌を巻て言ふ事なく則ち膝を屈め顔を押へて其矢を抜たりけるこれを見聞せる人々景政の勇を感じ天晴剛の者やとて語り傳へて美談とせり爰も義家の舍弟新羅三郎義光と兵衛尉ふて在京して大内の宿衛を勤り居玉ひしが奥州合戦の事を聞兄弟の情狀止難く懇ひは暇を乞はれけれども勅許あさによつて暫くは都にお在せしが遂に堪かねて寛治四年に二月下旬或る夜竊に下向せむやと乾と思ひ立て郎等三人も下部二十人許りを召具して急ぎ奥州に馳下つて義家に對面ある義家、義光を見玉ひて餘りの嬉しさ喜びの涙を流して宣ふやう後難を願みす身に代て義家を救はんと遂に下向の條祝着の至りお堪へず今日足下の來り玉へるの故入道殿の養生りておとしたるとこそ覺ゆ侍れどて頼て義光を副將軍として征伐の部署に及せれる

第七回

兩將の仁智千歳ぶれを美とし
二賊の暴戻百世まれを醜とす

是より先き義光都を忍び出玉ふて其夜の黎明に新羅明神の寶前に若かれ奉幣し玉ふ所に逃
の彼方より喘々馳來る者あり扱と勅許なきに都を立去りし罪を問とせらるべきは使あらん
と 讒で待玉ふ程あく其人至りぬ難と見玉ふに樂工豊原時秋なり何事あると問はせけれ
を答へやけると時秋昨夜は館に参じし寢事の爲体常ならざれを扱と推し進らせは供仕り
侍んと存じて斯と馳参じていとぞやける義光聞玉ひて再三止め玉ひければを聞入奉らざれ
と力あく具せられける原來義光朝臣と智勇兼備の名將にて在すのみならず多藝みて音律の
事よ委く笙を時秋の父時元に學び玉ひて相傳の秘曲なる大食調入調曲までを傳られたりけ
る時元世を去る頃と時秋 幼かりしかを秘曲を傳ふる事を得ず其後成長して父の業を繼げ
れども相承の秘曲を知るに由なく且暮此事を深く歎き悲み居たるが今度義光奥州に下り玉
は、永た臥せとせあらんかとて一つに之其名殘も惜く又一つよと此秘曲の傳絶んを歎き
如何にもして受學がやと思ひて斯と從軍したりけるあり義光時秋の心を察せられて此二曲
を傳へ得させんと思されければと未だ機を得ざりける左右するうちや足柄山に到りぬ其



夜も月も暈にて春どはらへ旅の情いと、蕭條ありけきと時秋を召さき橋二枚敷て兩人其上る坐し扱宜ひける日來其許の胸中を察しつれとも閑なくて今日までは過したり今宵と月も殊に心あり氣ありいさや秘曲を傳へんとて旅も尙は廢し玉へる秘藏の筈と取出し大食調、入調曲の二曲を傳へ父時元が自筆の笙譜とさへ取添て賜りける時秋の年來の所望一時も足て喜び言ひん方をあし是より時秋を都に歸らしめては身之急ぎ與る下らさけるあれ案下休憩義家は義光の南向を喜び思されて與俱る軍議を疑し玉ひ只管兵を築め食を足し準備全く整ひければ馳て進發すべしとて同年九月に數萬騎の勢を率めて武衛、家衡の精銳れる金澤の柵に押寄らる同月十六日金澤に若玉ひ手合は明日の早天と定えて各々軍を分ちて陣を備へらるゝ折しと一行の斜雁雲上を南へ渡りける雁陣忽地に破れ四方お散て飛べり義家遂にこれを觀て怪み玉ひ我聞鳥亂るゝと伏兵あるありといへり一定敵此野の兵を伏せしあらんと仰せて急ぎ搜し索めけるよ案の如く多くの兵、榛藪の中より遁出けり素破脱すなど、吶喊で射たる程に三十餘騎を獲たりける其後義家人ゝに宣ひけると文武は車の兩輪の如し文のみにして武なければ弱く武のみおして文あければ智足らすして敗れを取らん我匡房に從て學びすと必き武衛の爲よ破られなんとて只管よ歎き玉ひしかを聞く者感美せず

といふ者なし斯て義家義光と金澤の柵を十重二十重お打圍で夜とあく日となく攻玉ひしかとて城中手術を盡して防ぎければ容易落べしとも見ぬたされ義家朝臣と兵共と屬さんどて兵糧を遣ふ毎よ剛鷹の座を設けて日お取りて剛に見ゆる者共と一座お居る臆病よ見ゆる者と一座お居けり各々臆病の座よ就く事を恥て屬み戦とすといふ事なし中にも腰籠口秀方といへる者の些とを負し事なくて一度と臆の座に就さうけり爰よ吉彦秀武は先日降参して義家の陣中に在りけるが進出てややう城中堅く守りいへる味方の軍既お泥侍りよけり斯とて何程力を盡して攻玉ふとも益あるまじくいまつ暫く戦を弭て唯速巻に巻て食攻めし玉ふべし、糧、食盡きたりて自ら城と落へさにていとおせを義家尤も同じ玉ひ則ち陣に圍示して陣を止めさせ二方と義家おれを巻さ一方の義光おれを巻さ一方と消衛、重宗これを巻く此くして日敷を送る程よ城中大に困乏如何もして寄手を怒らせ其機に乗て擊卻くべしとて武衛使を義家の陣へ遣て去言はせけると戦を止られてよりは日よ徒然限りなくい此方お龜次とて雙さ剛の者のい召ては覽ぞいへ其方よりを然るべた擊手一人出され召合せて互よ徒然を慰められ侍るべきかといひ送りけり義家頓て擊手を求め玉ふに次任が舍人お鬼武者といふ者あり心猛く力飽まで強のりけきとをよれを選びて出す頓て二人、陣の庭お

寄合り味方も敵を勝負いりにあつらんと堅睡を飲み、瞬もせずこれを観る兩人既も寄せ
て争ふと半胸飾りなりし鬼武者力勝りけんやと聲掛て控と其場に掛附けて起まじ立す助
を踏碎て殺しける城中此跡を見て龜次が首を取せと書と書を捕て荒出けり味方の兵は又龜
次が首を取んつとて同之荒合せけるが遂に入乱きて大に戦ひ家衛の勢数多討たれ手負とも
助けす遠く城お入りぬ城中は糧道を絶れて漸く飢渴に陥り男女彼首に集此首お寄て歡
さ悲と兵次第も落失けきを武衛今と我家運も是までなりと思案し使者を義光の許に立て
降参を乞ひける義家此事を聞れて許し玉とさりしかば武衛重て義光よ乞ふやう面りや聞
のさをも悔悟の丹心貫徹せずさりとて自ら鞍門に至らんも未だ將軍の心を知らず願くは君
公親を柵内に枉げらる武衛が面陳を聞召し玉とらんを伏して義望に堪へすいとぞや送り
ける義光往かざれば臆したりと思とんとて其由を義家に語り玉へば又許され武衛尙は
義光にやそやうは身渡り玉ふ事あるべからせいと然るべきは使一人を賜つて我思ふ事よ
くくや開かんといひければ其儀と苦しむるま太郎等共の中誰か往んせると披々皆應季方
こと然るべからんといふさらと季方召せとては敵へ近く招かれは使を仰付らる季方欣然と
降参し臆て赤色の袴の袴を着て太刀はかり佩て行向ひけるに柵中の兵指の如く立

四十六
義家義光の兵亂入く難伏せ切斃す事數を知せ城中の美女ども兵争ひ取く已が陣所へ引
るは是城中兵糧乏しとなりたるゆゑ人を滅して持歸んどの計略なり今此者共を悉く殺せ
バ城中再び落る者あるべうらすすれば敵の粮絶地盡て武衛家衛論となると期して待つ
べさにていといひければ義家最と仰せて落る者を獲らさ捕て首を刎られける城中此跡を見
て又落る者なし慈し程に武衛家衛糧全之盡て今何とも詮術なき曾取くに落支度のことし
たりける寛治五年十一月十四日の夜義家俄に陣に顯示しく宣ふやう敵一定願て落べけれ
を陣屋と最早不用なり疾建物と焼て煖と取候へと仰られしが果しく曉方に城中の小屋役所
ども皆火と放ち烟の中に喚き罵る事地獄の如し諸の敵落るぞ一人も漏れぞ討取といふま、
義家義光の兵亂入く難伏せ切斃す事數を知せ城中の美女ども兵争ひ取く已が陣所へ引

五十六

て行の夫の首の鉢は刺貫かれて先に行女と涙を流して後に行の無慚なりける次第なり武衛の如何ももして命助からんとて城中に池の傍りける身と沈み顔に藻を繋りて潜居けるが遂に見付出されく捕縛らる藤原千任も同く生虜にせられぬ家衛の花相子といふ馬と持たりける是と六郡第一の逆物なれば敵に取れんとを嫉しといひて頑き附け自ら射殺し其身と賤き下司の眞似して落行けるが縣小次郎次任に見咎められ今のは是までと冠りし笠をかぶり捨て暫く揉合ひしが次任力勝りけん遂に家衛を祖伏首掻切て義家の御前に奉る將軍これを見玉ひ喜の心骨も徹りければ自ら紅の衣取出て次任に被げ又鞍置馬一疋を引れる斯て義家武衛を召出して責て宣ふや軍の道勢を借て敵を撃つ古今定まれる例なり武則且の官符の旨を任せ且之故入道殿の語に依て味方に参り加とれり然るを先日千任に教て名簿ある由をすす件の名簿果して何の處に在るのらば出せ見んと宣ふ武衛一言の返答なく只首を地に着て助け玉へ助け玉へといふ義光義家はすされけるの降人を背ひるの者よりの例なり武衛今先非を悔て死を免されんとを乞ふ此を強よ殺さんと不仁にいひせやと育れければ義家首を左右に打振り玉ひ否とよ降人との戦の場を免れ未だ人の手に掛らざるうちよ咎を悔て首を伸べて参るものなり則ち宗任等の如き是なり武衛の取柄に於て生虜にせら

れ置の命の惜さに遂なとも降を乞ふよれと眞の降人と申さるべきか武士の風上にも置ぬ天下第一の臆病者なりと嘲けり給ひて銀仗大光房は仰せて其首を斬しめらる次に千任を召出して汝先日矢倉の上よてすつる事を此處よて今一度すして見よと宣ふ千任首を低て半句も出さず義家左右を見玉ひて誰かある故舌を抜けとすされければ涙直といふ者進出で手を以て舌を引出さんとせしかば義家急に押し止めて是虎口お手を入んとするが如し甚だ不覺の仕方なりとく更に他れ者よ仰せて鐵鉗を以て舌を引出してよれを斬り尙は高手小手に縛たるまゝ木の枝を吊上げて足の下に武衛の首を置居て踏しめける千任我主人の首を土足に掛くる事の餘りに必要ければ腕の折るも厭はず足を屈めて居たるが暫くありて力盡しよや終に足と下げて主れ書とぞ踏よける義家よれと見玉ひて年來の愁眉是よて既し開けたりと喜び玉ふ事限りなし是に於て其同類張本四十八人皆討れく陸羽一圍始て鎮り民皆其業と務りく正化と願願せざるべし

六十六

八幡太郎武勇傳

明治廿年十一月十一日
同 年十二月

出版御届
出版

定價金四拾錢

編輯人

大阪府平民

藤谷虎三

東區内本町二丁目一番地

大阪府平民

偉業館

東區唐崎町四丁目十番地

大阪府平民

岡本仙助

東區唐崎町二丁目二十三番地

大阪府平民

北島長吉

東區唐崎町二丁目二十三番地

偉業館出版書目

稗史小說部

日置季武編述

改頁小説 諸家合評 朝日之旗風

羽山尚德著

通俗 繪入 日本外史

繪本 義經勳功記

石川五右衛門實記

正史 實傳 以呂波文庫

繪本 英雄美談

官本 左門之助武勇傳

繪本 石山軍記

繪本 實錄 岩見武勇傳

柳菟伊賀越實記

加藤清正一代記

顯曾我物語

親鸞聖人御一代記

繪本 天草軍記

熊谷蓮生一代記

怪談 皿屋舖實傳

文覺上人橋供養

檜山相馬大作忠勇傳

繪本 真田三代記

八幡太郎武勇譽

爲朝武勇傳
錄倉三代記
繪源平盛衰記
平親王將門實記
繪本北條軍記
兒雷也豪傑物語
繪真書太閤記
繪德川十五代記
明治太平記
增補明治太平記
繪本楠公記
慶安太平記
繪足利十五代記

川中島軍記
越後傳吉孝子譽
平井權八一代記
繪關ヶ原軍記
賤ヶ嶽七本鎗
石井常右衛門實記
繪鼠小僧實記
大德寺燒香場
きられ與三郎實記
佐野義勇傳
大搦平八郎實記
廿三年末來記

慘風世路日記
悲雨世路日記
松前屋五郎兵衛實記
幡隨院長兵衛實記
世界一大奇聞
菅原天神御一代記
繪菅原實記
田官孝勇傳
佐倉義民傳
佐倉宗吾實傳記
繪本大阪軍記
繪荒川武勇傳
汗血千里駒天下無双ノ英傑
阪本龍馬君傳
佐賀怪猫傳

男女交合得失問答
其外追次出版仕候

雜部

福井淳校閱 三宅弘編輯

實地製法新書

柳澤武運三編纂

龍頭登記請求手續法註釋

訓令同施行條例

鈴木政男編纂

傍訓刑法袖珍小本

傍訓治罪法合卷

福井淳註解

傍訓刑法

內訓

傍訓刑法附則

頭

傍訓治罪法合冊

指令

村田海石書

三體千字文

益永晃雲編纂 名和竹堂淨書

改正文證大全

伊澤修二著

教育學

中村正直譯

西國立志編 一名自助論

後藤芝山訓點 明倫館藏版

改訂 五經

◎袖珍小本ノ部

増補再版

粹之種本

唱歌諸歌

軍歌

竹内隆信編輯

新體詩歌

普通早字引大全

八木鹿三編輯

漢語新選萬通早字引大全

正續文章軌範纂語字類

龍頭十八史略纂語字類

註釋

木村方齋纂註

沈德潛編次評點

纂評唐宋八大家文讀本

岡白駒箋註 佐々木向陽撰

箋註蒙求校本

後藤嘉幸訓點

四書假名附

後藤芝山定本

改小學句讀

正

卷菱湖附書 村田海石加筆

四體世話千字文

即智 大岡難訴裁判

淨瑠璃繪 大和文庫全三冊

稽古本木 一と口 天狗の世の中

淨瑠璃 一口 天狗

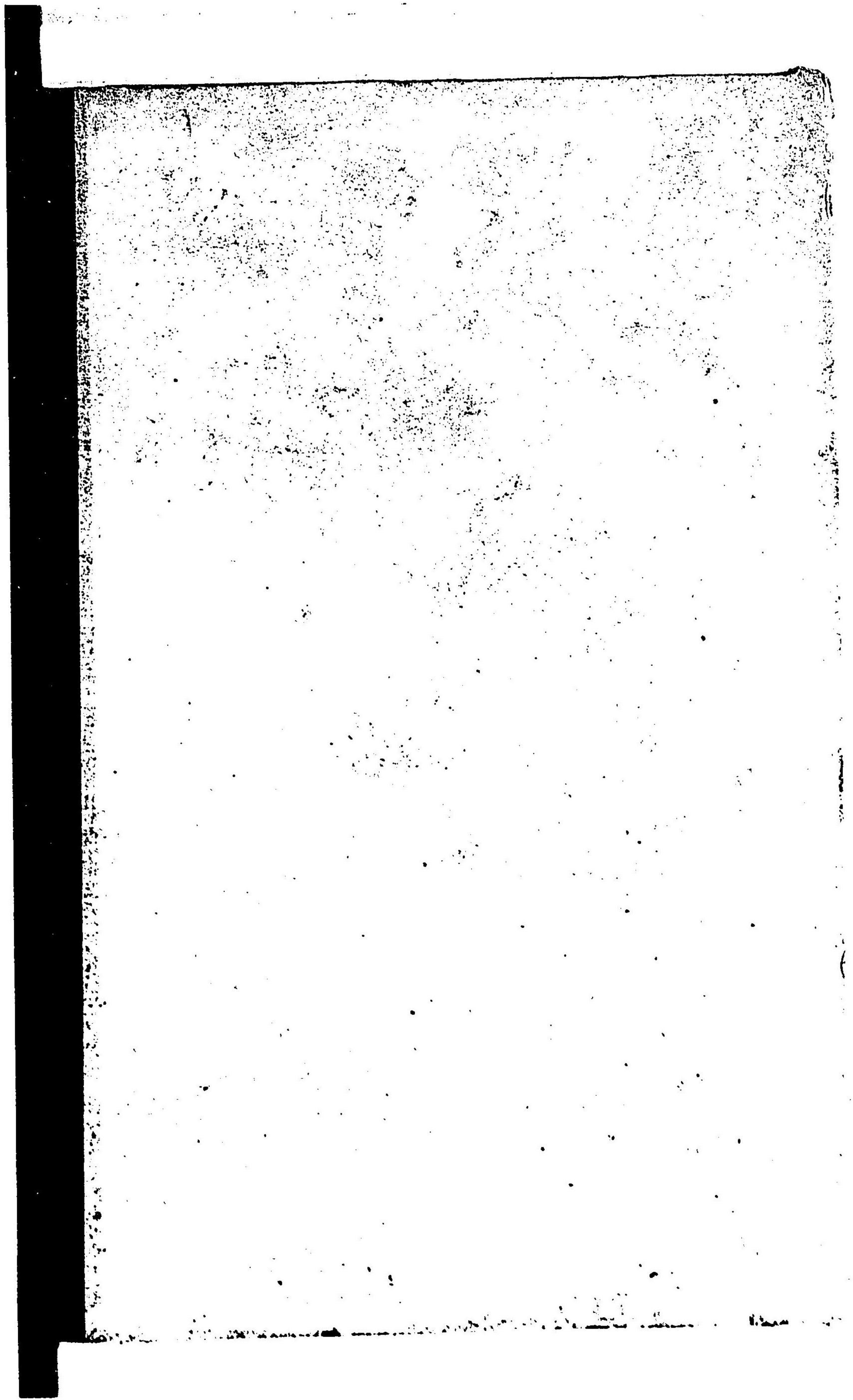
淨瑠璃 一口 天狗

佐和瑠 一口 天狗

右の外追々出版仕候間何事

御引立の程貴重よも

車懸願い



特12
981



091252-000-4

特12-981

八幡太郎武勇誉

偉業館

M20

DBN-2106

